

甕倉出現の意義

——中世経済の一側面——

菅 原 正 明

はじめに

1 埋甕遺構

2 大甕の用途

3 油座

4 甕倉出現の意義

5 大甕を使用した諸職

おわりに

論文要旨

西日本の中世遺跡から発見された甕倉（埋甕遺構）の大甕の用途について検討してきた。この大甕は藍甕・酒甕・油甕等の用途が考えられるが、この中で油甕については特定できる見通しがたった。それは、発掘調査により火事で焼け落ちたと確認されている甕倉の中から出土した大甕内面には黒色物が付着しているものがあること、この黒色物の科学分析をおこなったところ、タル質と炭化物の混合物や煤であることが判明したことなどから、黒色物が付着している大甕には、燃える液体、油が入っていたと推測した。つまり甕倉が火事で焼けた際に、大甕内の油が燃え上がり、煤が大甕内面に付着したもので、この甕倉は油倉であるとみた。

これらの甕倉の油はその貯蔵量が多いことから、燈明用の油として特定の機構の下に販売されたものと考えられる。奈良市北室町、宇治市街の甕倉は油座の機構の中で、根来寺坊院の甕倉は根来寺の機構の中で、大阪道修町・高麗橋の甕倉は大都市の油問屋の機構の中で、また、一乗谷朝倉氏の甕倉は朝倉氏城下の機構の中で考えてゆく必要がある。特に根来寺の興隆の基盤は燈油の販売にあり、この資本の運用により、巨大な富を蓄積し、これらを守るために僧兵が鉄砲で武装し、また泉州地方に出城を築き、富を守っていたと想定される。しかし、全国制覇を狙う羽柴（豊臣）秀吉により天正13年（1585）に根来寺は焼討され、16世紀末に栄華を究めた中世の根来寺はここに崩壊した。

中世根来寺の興隆の鍵は甕倉の大甕の中に隠されていたのである。
